中秋無月母に侍す　　頼山陽

此の夜を同うせざること十三回　重ねて得たり秋風一巵を奉ずるを

恨みず尊前月色無きを　看るを免る児子鬢辺の糸

【作者】頼　山陽（一七八〇～一八三二年）、名は襄（のぼる）、字（あざな）は子成、号は山陽。安永九年十二月大坂江戸堀に生まれた。父春水は安芸藩の儒者。七歳にして叔父杏平について書を読み、十八歳で江戸に遊学した。二十一歳京都に走り脱藩の罪により幽閉される。後、各地を遊歴し天保三年九月病のために没す。年五十三歳。著書に「日本外史」「日本政記」「日本楽府（がふ）」等がある。

【語釈】＊中秋無月侍母…月見の晩、母に侍して月見をしたが　生憎（あいにく）月がでなかった。　＊重　得…ふたたび何何することができた。

＊一　巵…一つのさかずき。　＊尊　前…さかだるのまえ（母のまえ）　＊鬢　邊…びんのあたり

【通釈】母と共に、中秋の月見をしなくなって、もう十三年もたってしまった。今宵（こよい）は涼しい　秋風のもと、重（かさ）ねて母を迎えて、一杯の酒を差し上げることができた。残念なことに、天気が悪く月を見ることはできないが、そのために、自分の鬢（びん）のあたりの白髪（はくはつ）を、みられることもなかったのが、せめてものすくいであった。

（親に心配させまいとする山陽のまごころが溢（あふ）れている。）